

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：32675

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2015

課題番号：23720118

研究課題名(和文)狂歌書目総覧の作成

研究課題名(英文)Creating a catalogue of kyoka related publications

研究代表者

小林 ふみ子 (KOBAYASHI, Fumiko)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：00386335

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：「狂歌書目総覧」を個人が手がけることを志し、既存書誌データを活用し、個人文庫茶梅亭文庫の書誌情報を加えてまとめることを考えたが、狂歌資料書誌の複雑さに起因する問題と茶梅亭文庫の事情による研究の遅れにより、総覧作成は断念した。本研究の核心といえる茶梅亭文庫資料の把握に絞り、その目録の完成を目指して作業を進めつつ、山東京伝や市川団十郎が入集するなど他ジャンルともかかわる資料を含む稀覯本や狂歌史や出版史上、重要な資料について研究し、うち一点を翻刻紹介した。

研究成果の概要(英文)：Aiming to compile the complete catalogue of kyōka (comic verses comprised thirty-one syllables) books issued in early modern Japan by oneself, I first planned utilizing bibliographical data which are already in public and edit them with the list of Sabaitei-bunko, a private collection which I make in this project. However, I cannot but to give it up because of several problems deriving from the complexity of kyōka books bibliography and delay from a private matter of the collection. I focused on the study of the collection and have got near to complete its list. I introduced some rare books which are important in terms of the history of kyōka and publication, or in relations to other genre, and transcribed one of them.

研究分野：日本近世文学

キーワード：狂歌 書誌 一枚摺 山東京伝 市川団十郎 北斎 歌麿

1. 研究開始当初の背景

江戸狂歌は、十八世紀後半の江戸に端を発して幕末に至るまで、身分的にも地域的にも幅広い流行を見せた。狂歌の詠作や指導をもっぱらにする判者と呼ばれる人びとだけでなく、戯作者や版元、絵師、役者など、文芸や出版にかかわる人びとが加わってその交流の媒介となった点で近世後期の文化を考えるうえで重要である。また東日本を中心に、諸国に流行が拡大して無数の素人作者たちを生み出したことによってこの時期の文芸の社会的な影響力を考えるうえで欠かせない要素といえる。ことに狂歌師たちが挿絵入りの私家版一枚摺（摺物）や狂歌本挿絵を注文したことによって、浮世絵派を中心とする絵師たちの画業を支えた点も見逃せない。

十八世紀初頭より地方に普及して同様の役割を果たしてきた俳諧においては、各派に分かれて全国的な俳壇のようなものが成立しなかった。そのため俳諧が大衆的な作者たちに全国的な視野を与えることがさほどなかったのに比べ、狂歌は諸派が江戸を拠点として交渉をもったことで江戸狂歌壇が成立し、それを拠点として地方作者たちの文芸的な交流を促すとともに、諸国の作者、また名所や名物を視野に入れた出版物を出したことで、作者間で国家的統合の認識を深めた点も特徴といえる。

しかしその江戸狂歌の研究は、その流行をもたらしたことに加えて幅広い文事で江戸文壇の大御所となった蜀山人こと大田南畝、およびそれを引き継ぐとともに読本や国学といったジャンルでも多角的な活躍を見せた六樹園宿屋飯盛こと石川雅望を除けば、これまでさかんであったとはいいがたく、時代を追ってどのような判者がどのような組織をもったか、どれほどの狂歌師がいたのかという基礎的な見取り図も、菅竹浦『近世狂歌史』（日新書院、1940年）以

来、更新されていない。江戸狂歌の主要な作品を翻刻した『江戸狂歌本撰集』（東京堂出版、1998～2007年）全15巻の出版は行われたものの、江戸狂歌の作品のごく一部を収めるにすぎず、その全貌を見通すにはまだまだほど遠い状況にある。

総合的な近世狂歌研究を進めるためにも、その基礎としてどのような刊行物（書籍や一枚摺）が出されたのかについての把握が欠かせない。とはいえ早くに菅竹浦『狂歌書目集成』（星野書店、1936年）はあるものの、時代的な制約もあり、今日目からすると多くを網羅したものとはいいがたい。狂歌の出版物は私家版であるために伝存点数が少なく、また書名や刊記を備えた完全な出版物以外に、簡易製本された段階の不完全な冊子、あるいは一枚摺との中間的な刊行物などもあり、他ジャンルのように『国書総目録』やそれを引き継いだ国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースで概要を把握することも現状では困難である。

そこで上方・江戸を区別することなく、総合的な狂歌関係出版物の一覧を作成することが狂歌研究において重要な課題となっていた。過去に『江戸狂歌本撰集』を刊行した顔ぶれで計画されたものの、諸般の事情で実行に移されずに終わった経緯もあり、またそれ以前にも数十年前に近世初期狂歌、上方狂歌を中心に主要な作品を収めた『狂歌大観』（明治書院、1983-85年）の刊行後にも発案されたもののそのままになったこともあると仄聞する。それだけに狂歌研究の長年の課題として積み残されてきたのが狂歌書目総覧の作成であったといえる。

2. 研究の目的

そこで本研究では、その基礎として狂歌関係の出版物のなかでも、まずは一枚摺を除く書籍の一覧を作成することを目指した。狂歌関連の出版物は、上記のように把握が

難しい面がある一方で、慶應義塾大学図書館の野崎左文旧蔵書類、九州大学文学部富田文庫、名古屋市蓬左文庫雑賀重良旧蔵書、聖心女子大学図書館武島羽衣旧蔵書、また往年の大田南畝研究者浜田義一郎氏の衣鉢を継いで石川了氏が尽力して収集された大妻女子大学図書館蔵書など、狂歌関連資料だけでまとまったコレクションがあることも特徴といえ、それをまとめることで狂歌本の全貌が見えてくると考えられる。

そうしたコレクションのなかに大阪市の個人文庫、茶梅亭文庫がある。上方狂歌を中心として狂歌本の書誌を研究してこられた羽衣女子短期大学名誉教授中野眞作氏が長年にわたって収集してこられた資料群であり、また中野眞作氏が研究者人生をかけて各地の図書館・資料館などをまわって集められた狂歌本書誌の記録とともに、狂歌研究において見逃すことのできない重要な文庫である。他に伝存を聞かない貴重な資料の所蔵や版を重ねて普及した狂歌本の諸本を揃えるなど、研究的な関心に応える点で他に例のないコレクションながら（その点では市場的価値とは必ずしも一致しないことを文庫主のために書き添えておく）、どのような資料があり、どのような意義があるのか、紹介が追い付いてこなかった。その茶梅亭文庫も、所蔵者の高齢化によって将来的な存続が危惧され、その記録をいかに作成しておくかが大きな課題となっている。本研究は、その茶梅亭文庫の資料と、所蔵者中野眞作氏の狂歌本書誌研究の成果をもとにして、近世日本約 260 年間にわたる狂歌本の刊行状況を把握することを目的とした。

3. 研究の方法

多人数で分担・協力して作成する場合であれば、基準を定めてあらためて分担して集めた書誌データに基づいた目録を期すことができるが、このプロジェクトでは狂歌研

究者が数少ない現状を鑑みて、中野眞作氏と協力しながら個人でできる方法を模索した。すなわち、信頼できると判断される既存の書誌データの活用である。石川了氏の作成にかかる大妻女子大学図書館蔵の狂歌資料目録、名古屋市蓬左文庫雑賀重良旧蔵書目録、これに小林が作成したソウル大学校図書館、聖心女子大学図書館武島羽衣旧蔵書、東京大学国文学研究室蔵本のデータ、その他の図書館で集めてきた書誌、および九州大学文学部富田文庫の大部分を含む中野眞作氏がこれまで集めてこられた狂歌本書誌を統合し、茶梅亭文庫所蔵資料の書誌情報を加えたうえに、日本古典籍総合目録データベースなどによって確認できるここにはない書目を補うというつもりであった。狂歌本の特徴として、もう一つ、絵入本を中心に海外、とくに欧米の美術館・博物館などのみに所蔵が確認できる資料が少なくないということがあるが、これも近年のデジタル化の進展によりある程度カバーすることを見込んでいた。

とはいえ、二つの要因でこの計画は挫折した。一つには、この計画の鍵となる茶梅亭文庫が急な先方の個人的事由により当初から三年余りにわたって閲覧利用できる状況ではなくなったことである。もう一つは、想定していた書誌データに齟齬や不確かな部分があり、当初の予定があまりにも観念的なものでしかなかったことが明らかになった点である。

それは狂歌本そのものの特質に由来する問題であり、编者、(狂歌合の)判者と開催主、出資者と多くの狂歌師名が場合によっては十名以上にもわたって複雑に入り交じり、書誌の取り方によってそれをどこまで取るかということの相違（あるいはそれが不明であったり、不確かであったりしたこと）、またその編集ないし開催したグループの認定基準のぶれ、狂歌合の場合は開催(開

巻) 時期と刊行時期の混交などといったさまざまな問題があった。さらに書誌記録相互の齟齬、たとえば(商品として製作されたのではなく) 配り本であることから大きさなど体裁の違いがあるといったこと、挿絵が墨摺りか、色摺りかなど、書誌の取り方によっては情報が不十分であったということもあった。

これらの点で情報の統合を断念せざるを得ず、本研究において核心といえる、これまで公開されてこなかった茶梅亭文庫資料目録作成へと縮小することとなった。

4. 研究成果

上記のような狂歌資料そのもののもつ複雑な問題は、それに向きあってはじめてわかるどころでもあり、そのこと自体も後世の研究者のためには記録しておきたいところであるが、それはひとまず措くこととしたい。

茶梅亭文庫資料目録については、ふたたび文庫主に協力を仰げる状況になってから(とはいえ、ご高齢のため少しずつではあるが) 約2年余、相談しながら進めてきてはいるものの、最終年度までに公開しえる段階には至らなかった。とはいえ、状況としては第一段階の把握はほぼ終わりつつあり、今後諸般の確認作業を行って完成させ、公開を目指していきたい。期限のある研究としてはそれ以内に成果をまとめえなかったことにはなるが、以下のような、他に例のない珍しい本や、国内機関に伝本のない本が見つかるなど、将来、「狂歌書目総覧」と呼び得るものを作るにあたって欠くことのできない資料を把握したことをはじめとして、まずはこの文庫の記録を作成したことはそれなりに意義のあるものと考えている。

まず稀観本については「茶梅亭文庫の江戸狂歌稀観本」で報告した。近世文学研究の他ジャンルにかかわる発見として重要と

いえるのは、戯作者山東京伝が助力して編集・刊行された桑折の狂歌師上水下見編『老寿杖』(1798年刊)である。本資料によって京伝が陸奥国の狂歌人たちと個人的な関係をもっていたことが判明し、同時期の京伝作品と照らし合わせることによってこの時期を境として京伝が江戸市中の事情に暗い地方の読者を意識して作品の舞台や内容を普遍的なものとしようとしたと推測されること、江戸を紹介するような作品を出すようになることと整合することが明らかになった(この点は「京伝と陸奥狂歌人たち」で論じた)。これまで、正式な外題(題簽)が知られず『名取の老』の表題で部分的にその存在に触れられたことはあったが、一般研究者のアクセスが難しい地方の個人蔵本による報告であり、それを翻刻も含めて紹介したことによって京伝研究にも寄与しえたと考えている。京伝、および五代目市川団十郎の狂歌が入集していて他ジャンルとのかかわりで重要なのが、もう一点の四方(鹿都部)真顔の盟友酒月米人編の『雄花集』(1805年刊)である。他に伝本の存在が知られないもので、一葉の色摺り挿絵があることも資料的に貴重である。というのはこの前年文化元年に色摺挿絵の禁令が出ており、私家版の狂歌本もその影響を受けて文化期前半は色摺本が極端に少なくなる(旧稿:拙著『天明狂歌研究』一章五節)。そのなかで禁令直後の作としてもっとも早い例の一つを見いだし得たことになる。

『老寿杖』も陸奥の狂歌人たちが多くを占める狂歌集であるが、やはり多くの陸奥を含む地方の地名を冠する狂歌人たちの自筆を版下として刊行された狂歌集があることがわかった。浅草庵市人の序をもつ同連の狂歌集で、入集者の名乗りから文化期後半頃の刊と考えられるが、題簽も内題もなく原題未詳のため仮題「浅草連系逸題狂歌集」としてその書誌情報をまとめ、入集者

の地名と狂名を摘録した（同じく「茶梅亭文庫の江戸狂歌稀観本」）。逸題のため不明な点も多いが、横本という狂歌本では多くない書型に照らして確実に新出といえるものである。

この資料と関連して述べれば、茶梅亭文庫には、狂歌合わせの成果集である半紙本大の数丁仮綴じ（またはその合綴）も多く収蔵されるが、そのなかにはたとえばやはり文化頃の浅草連系の『みちのくぶり』と題するものもある。これらの資料からは、狂歌において江戸と地方各地を中心対周縁という関係で捉えるだけでなく、地方それぞれの自立性ないし独自性、あるいは地方間の相互交渉の動きとして考えるべきだという観点が浮かびあがった（「狂歌判者浅草市人の地の利」「江戸狂歌の地方普及一四方真顔再評価のための序説」）。

このほかにも、茶梅亭文庫には他に伝本が2本知られるだけの朱楽菅江編『八重垣縁結び』（1788年刊?）、大英博物館蔵本以外存在が知られてこなかった酒月米人編『四方山』（1809刊）、同じく大英博物館蔵本ともう一本、古書市場に出たまま所在が判らなくなっている朱楽連春興、便々館湖鯉鮒編『春の戯れうた』（1802年刊）があることにも併せて言及した（「茶梅亭文庫の江戸狂歌稀観本」）。さらに中野眞作氏自身のご研究として公開されたいという意向のある資料も何点かあり、積極的に協力して今後の発表を期している。

以上はおもに書籍の形態をとる資料についてであるが、茶梅亭文庫には数多くの一枚摺があることも判明した。しかも欧米の美術館などに多い、色摺り挿絵を添えて美術的価値の高い摺物だけではなく、むしろ墨摺の狂歌合の報条やその得点一覧（いわゆる番付・「甲乙録」）など、狂歌壇の動きを知るうえで資料的価値の高いものが多く含まれる。その研究は今後の課題であるが、

狂歌史研究においてとくに重要と考えられる2点を報告した（「江戸狂歌の地方普及一四方真顔再評価のための序説」）。一つは山陽堂山陽という狂歌師の手による「狂歌年代記」（寛政末／1800年頃刊）という、一般的な実用の年代記を模した形状で江戸狂歌の歴史や現状、作法を記録したもの。山陽の主観や恣意的な編集は混じるものの貴重な資料として従来東京都立中央図書館蔵のものが利用されてきたが、それはいったん版木が焼失した後、1814年の再版であって、今般はじめて初版の存在が確認でき、再版とは異なる点が多々あることが明らかになった。もう一つは、四方（鹿都部）真顔が狂歌合の判者の任を引退することを宣言した報条である。従来その存在も含めまったく知られてこなかった資料であり、江戸後期の狂歌壇の重鎮の動向を知らせるものとして狂歌史研究上、重要な発見であった。真顔については研究がほとんど進んでいないが、その要因の一つに例年刊行した狂歌合の成果集の所在がわからない、あるいは端本しか確認ができないものが多いという問題もあるが、とくに「俳諧歌〇〇百首」と題する彼の晩年に編まれた年々の成果集についても茶梅亭文庫には豊かな所蔵があることもわかった。

なお、茶梅亭文庫蔵書を中心に、またその他の狂歌本について狂歌人の入集状況を調べたことによって、北斎の挿絵で名高い狂歌絵本『隅田川兩岸一覽』の刊行（画稿の成立とは別に）が従来言われていた1804年頃ではなく、1813年または1816年であることを指摘した（「北斎画『絵本隅田川兩岸一覽』の刊年をめぐって」、その後さらに浅野秀剛氏が『浮世絵芸術』169号〈2015年〉掲載の研究ノートで本稿を引用され、袋の「前北斎戴斗」より1816年と確定した）。また同様の方法により、歌麿画で有名な狂歌絵本『潮干のつと』（1789年刊）の編集

がすでに 1787 年以前から始まっていたことも明らかにした（「狂歌絵本『潮干のつと』」）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

①小林ふみ子、茶梅亭文庫の江戸狂歌稀観本、日本文学誌要、査読無、93 号、2016、頁未定

②小林ふみ子、京伝と陸奥狂歌人たち、文学（隔月刊）、査読無、17 卷 3 号、2016、頁未定

③小林ふみ子、江戸狂歌の地方普及一四方真顔再評価のための序説、日本文学誌要、査読無、91 号、2015、pp. 5-22

④小林ふみ子、狂歌判者浅草市人の地の利、文学（隔月刊）、査読無、14 卷 4 号、2013、pp. 70-84

⑤小林ふみ子、北斎画『絵本隅田川兩岸一覽』の刊年をめぐる、詩歌とイメージ（勉誠出版）、査読無、2013、pp. 271-286

⑥小林ふみ子、狂歌絵本『潮干のつと』、鳥獣虫魚の文学史魚の巻（三弥井書店）、査読無、2012、pp. 315-329

〔学会発表〕（計 1 件）

Fumiko Kobayashi, The Cultural and Social Impact of Comic Verse Craze in the Late Tokugawa Period, Japan Research Centre Seminar, School of Oriental and African Studies, London, Oct.-Dec, 2016（発表日未定）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 ふみ子 (KOBAYASHI, Fumiko)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：00386335